

「考えさせられる」葬儀(五)

「気遣い」ゆえに個人化する葬儀と墓

— 祭祀・追悼を求めない家族と「こころ」のゆくえ — (後編)

浄土真宗本願寺派総合研究所

浄土真宗本願寺派総合研究所では、急激な変化をみせる「葬儀」について、多角的な視点から調査・分析を行っている。総合研究所では、「葬儀」の現状を考えるにあたり、

- ①HPや書籍など、各種メディアから発信されている声
- ②社会にあるさまざまな声
- ③葬儀現場に従事している専門家の声
- ④僧侶の声

を収集して検証を行い、現代社会における僧侶や寺院のあるべき姿に関する研究を行っている。葬送儀礼については、葬儀そのものの変化について注目されているが、「墓」「納骨」の問題も重要であり、「永代供養」「墓じまい」「改葬」「自然葬」などをキーワードとして、メディア等によって「墓」や「納骨」を

めぐる近年の変化の様子が取り上げられている。

2019年1月、「墓」の変化の要因を探るため、宗教社会学を専門とし、さまざまな媒体で葬儀や墓を含めた現代の諸課題について発信を続けている櫻井義秀氏(北海道大学教授)を講師としてお招きし、研究会を開催した。

研究会の講題は「気遣いゆえに個人化する葬儀と墓——祭祀・追悼を求めない家族と「こころ」のゆくえ」である。講義は2部に分けて行われた。前回は、前編として第1部「現代の葬儀で何が肝心なのか？」の講義概要を報告した(『宗報』2019年7月号)。今回は、後編として、第2部「現代人の幸福と宗教」の概要を掲載する。

【講義の概要（後編）】

現代人の幸福と宗教

一、ウェルビーイング（幸せ）とは

葬儀や墓が「個人化」していることを念頭に置くと、個人化は人々のウェルビーイング（幸福）にどのような影響を与えたのか、そこに、宗教はどう関わるのかが問題となる。

「ウェルビーイング」には、「主観的な幸せ（幸福感）」と「客観的な幸せ（生活基盤や社会保障等）」がある。その人が幸せと感じているかどうかを、感情や認知を手がかりに測定したものが「主観的な幸せ」である。「客観的な幸せ」とは、社会学で試みられているような、客観的な条件を指標とする方法である。例えば、経済学はお金、社会学は家族や近所付き合い、良好な人間関係など、政治学は平和に暮らせるか、などを指標として取り上げて研究が進められている。

この「主観的な幸せ」と「客観的な幸せ」は、双方を重ね合わせて「幸せ」という観点から考察することも可能であるし、

「不幸せが無い状態」から考える観点もある。例えば、仏教において、「苦を減らす」という言い方がある。苦の原因を見つけていき、苦に自分たちの心が左右される状況を減らしていくことで、ある種の安心を得ると考える。こういう発想も「幸せ」だと思う。これをすれば、お金も増えて、病気も治って、寿命も延びるといようなタイプの幸せばかりではない。

では、どういう側面から「幸せ」を見ていくのか。これは実に難しい問題である。そこで、一般の人々の幸福感から幸せの諸条件を考察しようと考え、無作為抽出の1200名を対象とした全国調査を行った（2017年実施）。面接調査員が戸別訪問を行い、アンケート調査を行う、客観性が高い調査方法である。インターネット調査ではネットユーザーというバイアスがかかるため、面接調査で行った。

最初に、現在の自分の幸福感を1〜10の段階で回答してもらったところ、平均は6・87であった。日本人の幸福感はまあまあ高いということであろう。幸福感に大きく影響するのは、子どもの頃に形成された性格、さらにいえば親の置かれた環境である。子どもの頃に形成された幸福感は、大人になっても継続されるため、非常に大切である。また、健康と幸福感もかなり影響し合っており、健康状態が良いと幸福感が高くなり、健康状態が悪いと幸福感が低くなる。さらに、現在置かれている人間関係や、時間的余裕なども幸福感に影響する。つまり、個人の職種や環境やその時置かれた状況、家族構成などによって、

幸福感が左右されることがわかった。

一、ウエルビーイング(幸せ)と宗教

では、幸福感と宗教とは、どのような関係にあるのだろうか。日本では、この分野の研究は進んでいないが、今回のアンケート調査によって、興味深い結果が得られた。

まずは、宗教団体に関する質問である。

①「特定の宗教団体に所属していますか」

7割は「所属していない」と回答した。檀家だんかや氏子うじこであっても、そう思っていないということになる。

②「宗教施設へ通う頻度」 ↓【図3】参照

「無回答」・「通っていない」人で半数を超える。宗教団体へ所属している人であっても、定期的に宗教施設と関係を持っているという人は少ない。

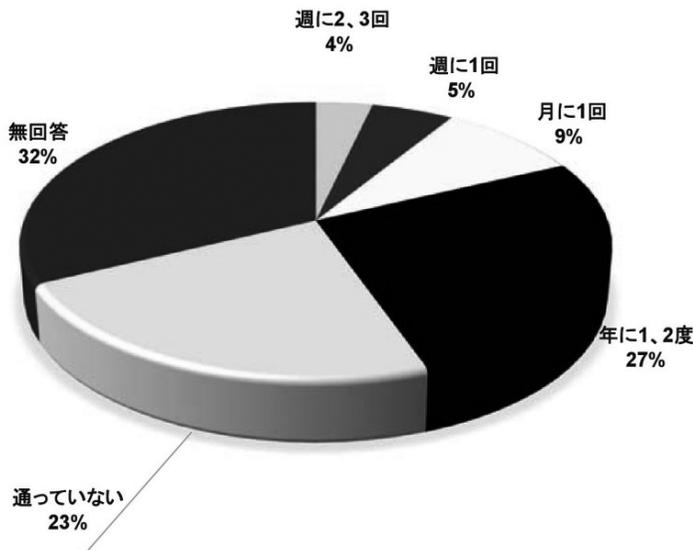
③「宗教団体への所属と主観的幸福感」 ↓【図4】参照

宗教団体への所属と所属なしとは、主観的幸福感に差異が見られない。教団ごとに見てもそれほどの差異がない。

これらは、宗教団体への所属という観点から質問をしてい

宗教施設へ通う頻度

図3



る。すると、所属していようとまいと、幸福感は同じであるという結果となる。教団別にみても、平均の幸福感はほとんど変わらない。

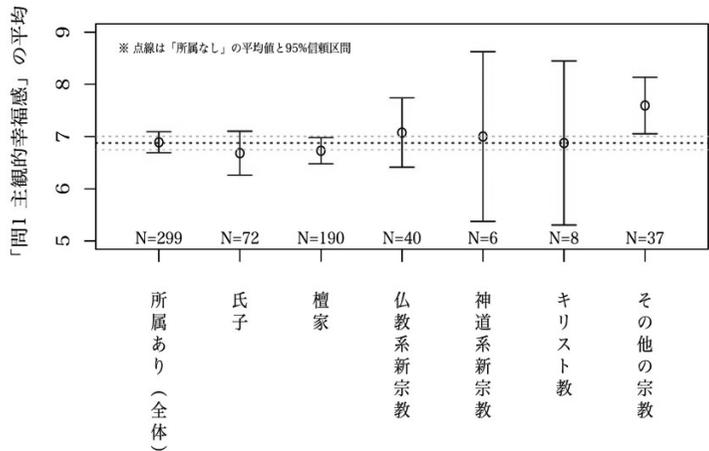
このように、日本人の宗教性を組織単位で見ると、日本人の宗教意識は見えてこない。しかし、「所属」ではなく、それぞれが行っている宗教意識や宗教行為について聞いてみると、全

宗教団体への所属と主観的幸福感

図 4

基本的に宗教団体への所属と所属なしでは主観的幸福感に差異がない

教団ごとに見てもそれほど差異がない



(報告者註) この図からは、「所属なし」と答えた方の幸福感の平均値(表中央の点線)と、所属ごとの幸福感の平均値(「○」印)があまり相違していないことがわかる。なお、「N」は回答者数、縦線は回答者の幸福感の分布を示したもので、縦線が長いほど回答にバラツキがある。

く異なる結果が出た。

④「宗教意識の項目と信じる度合い」 ↓ 【図5】参照

神や仏を信じる人は半分を超えている。あの世・来世の存在、神や仏のご利益についても、半数近くが信じている。一方、家相・墓相など、易や占い、スピリチュアルなどについては、2割程度であり、信じる割合が低い。

⑤「宗教実践の項目と実行の度合い」 ↓ 【図6】参照

初詣やお盆・彼岸での墓参りなどは、実行の度合いが高く、8割を超えている。しかし、宗教団体の行事への参加や聖典等を読むことについては、割合が少ないという結果が出ている。スピリチュアル系も低い数字となっている。

⑥「宗教的な心の大切さと主観的幸福感」 ↓ 【図7】参照

宗教団体への「所属」にかかわらず、宗教的な心を大切だと思う人の幸福感が高い。

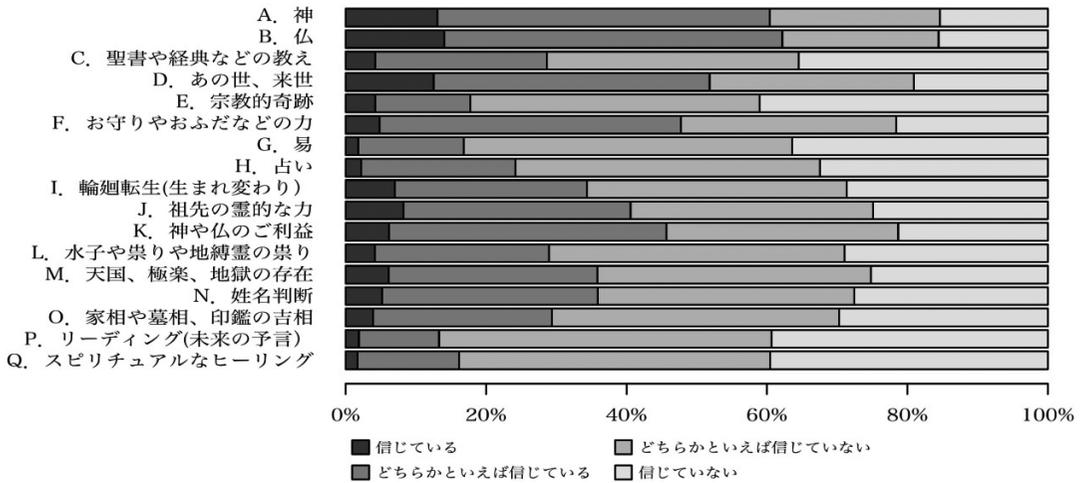
⑦「宗教施設に通う頻度と主観的幸福感」 ↓ 【図8】参照

宗教団体に所属している人は、通う頻度が高くなると、主観的幸福感が高まる。

これらにより、宗教と主観的幸福感の関わりについての傾向

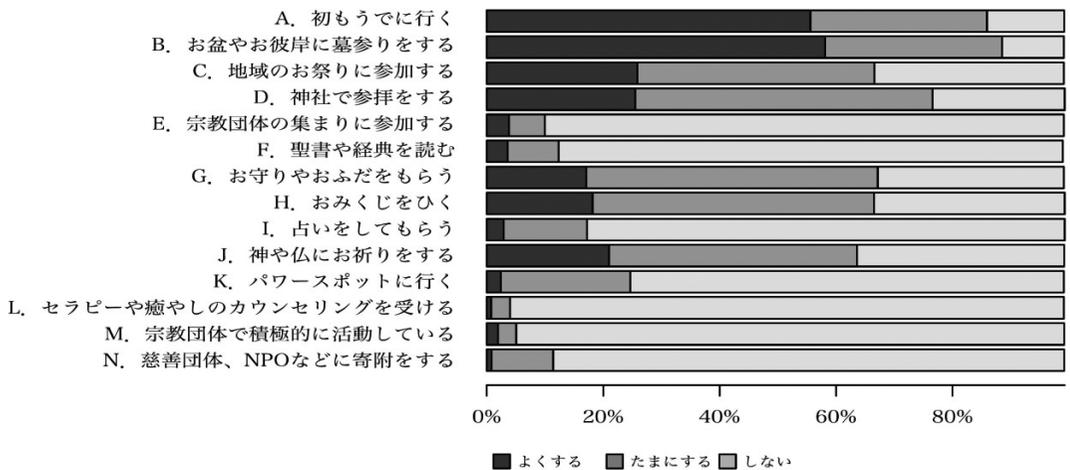
宗教意識の項目と信じる度合い

図5



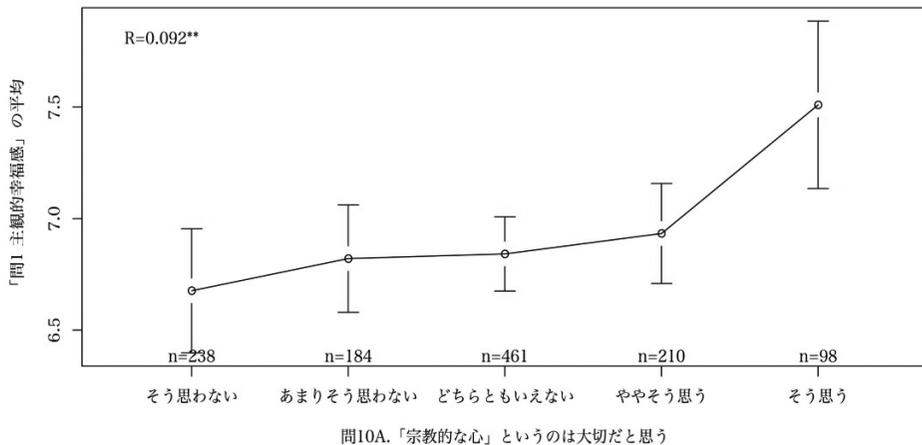
宗教実践の項目と実行の度合い

図6



宗教的な心の大切さと主観的幸福感

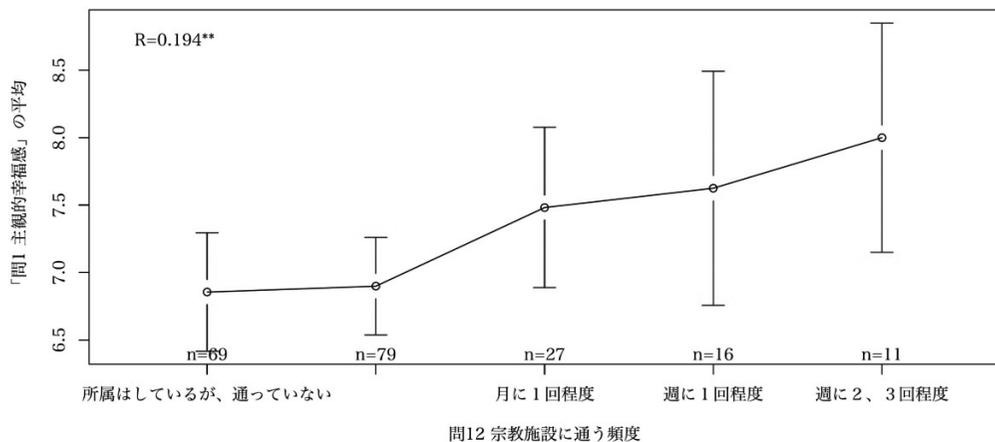
図 7



(報告者註) この図からは、「宗教的な心というのは大切だと思う」と答えた人の主観的幸福感が高いことがわかる。なお、相関係数「 $R=0.092$ 」は、主観的幸福感の平均（縦軸）と○印は各項目の平均値に、直線的な関係はないことを示す。「 n 」は回答者数、縦線は回答者の幸福感の分布を示したもので、縦線が長いほど回答にバラツキがある。

宗教施設に通う頻度と主観的幸福感

図 8



(報告者註) この図からは、宗教施設に通う頻度が高い人ほど主観的幸福感が高いことがわかる。なお、相関係数「 $R=0.194$ 」は、主観的幸福感の平均（縦軸）と○印は各項目の平均値に、直線的な関係はないことを示す。「 n 」は回答者数、縦線は回答者の幸福感の分布を示したもので、縦線が長いほど回答にバラツキがある。

を知ることができる。

第一に、宗教団体についてである。

- ① 宗教団体への所属意識は薄い
- ② 宗教団体に所属していたとしても、宗教施設へ通わない人が多い
- ③ 宗教団体の所属の有無による幸福感の差異は、あまり見られない

第二に、宗教意識についてである。

- ④ 神仏や来世については信じる人が多い
 - ⑤ 初詣や墓参りをする人は多い
- さらに、もう2点指摘できる。

「迷惑」をかけたくないから、後継者の存在を問わない墓を選ぶ人々が増加していることは既に指摘したが（『宗報』2019年7月号掲載の〈前編〉参照）、その一方、お盆や彼岸での墓参りは、数ある宗教実践の中で、実行の度合いが最も高い数値が出ている。

また、宗教施設に通う人々の幸福感に注目すると、宗教団体への所属意識を持つ人は少ないという方が多いのだが、宗教施設に通う頻度が高ければ高いほど、主観的幸福感が高まるという結果が出ている。

そこで、次のような傾向も指摘できる。

- ⑥ 宗教的な心は大切であるとする人や、先祖を大切に
する人の幸福感は高い

⑦ 宗教施設に通う頻度の高い人の主観的幸福感も高い

これらをまとめると、日本人の宗教行為は、次の3つに分類される。

- ・ 制度的な宗教行為（団体への所属、行事への参加など）
- ・ 慣習的な宗教行為（墓参り、神社仏閣への参拝など）
- ・ スピリチュアル（占いなど）

本調査によって、制度的な宗教行為や慣習的な宗教行為は、宗教意識を持つて行動する人の幸福感を増加させていることが知られた¹。日本においては、宗教団体への所属という点では平均的な幸福感と変わらないという結果が出たが、実際に宗教行為を行うことで幸福感は高まり、宗教施設に通わない人より定期的に通うの方が、明らかに幸福感が高いことが認められる。

以上を踏まえて、これからの展望を示してみたい。幸福感を考えるときに、従来は「よき生 (Well-Being)」だけがウェルビーイングとして捉えられてきたが、「よき死 (Well-dying)」も考えるべきである。病に直面したとき、自己の死を感じたとき、幸福感は変化する。それを受容することによって、新たな人生観が得られると、幸福感が上がり、少なくとも下がることはない。これからは、「生」と「死」を合わせた形でのウェルビーイングを、「よき生 (Well-Being)」と「よき死 (Well-dying)」として包括的に考えるべきである。

そのとき、宗教施設や宗教者は、人生の最終段階におけるスピリチュアルケア、死後の葬儀・追悼におけるグリーフケアなどを含むケアの領域において、今後どのようにして日本人の幸福感を高めるような役割を果たしていくのか。これこそが、現代仏教の課題となる。

なお、この調査の結果は、下記の書籍で調査項目ごとの集計含めて詳述している。

櫻井義秀編『宗教とウェルビーイング——しあわせの宗教社会学』（北海道大学出版会、2019年）。

【講義を承けて（後編）】

後編の講義では、日本人の宗教意識や宗教行為としては、仏を信じる心や、墓参りを行うといった宗教心が高いことが指摘された。前編では、人口減少社会・高齢多死社会を迎えている現代日本では、形あるものだけでなく、形のないものも含めて、世代を繋ぐことが限界となつていくことが明らかにされたが、その一方で、仏や先祖を大切に思う思いは、変わらずあることが示された。人々は、先師・先祖と今を生きる私たち、そしてこれから生まれてくる人々を繋ぐ宗教性を求めている、ということであろう。

親世代から子世代への継承性が危ぶまれる状況に直面してい

る中で、血縁・地縁とは異なる関係性を有する寺院や僧侶には、人々の疑問や不安に向き合うことで果たすべき役割があるはずである。浄土真宗の葬儀や墓は、大切な人の「死」を通して、私と故人との新たな関係性を結び、私と同様に残された方との関係性を確認し、そして何より、私と仏さまとのご縁を結ぶ場である。私たちとしては、このことを丁寧に伝えていくことが大切である。

総合研究所としては、今後も、葬儀や墓の変化のゆくえやその変化の背景に注視しつつ、宗教者としての役割を問い続けていきたい。

（報告者：富島信海）

〈櫻井義秀氏 プロフィール〉

昭和36（1961）年山形県生まれ。北海道大学教授。博士（文学）。専門は、宗教学。



主な編著書に『人口減少時代の宗教文化論——宗教は人を幸せにするか』（北海道大学出版会、2017年）、『しあわせの宗教——ウェルビーイング研究の視座から』（法蔵館、2018年）、『宗教とウェルビーイング——しあわせの宗教社会学』（北海道大学出版会、2019年）がある。

1 先行研究では、欧米でのキリスト教会型宗教は、定期的に通うことで幸福度が増すことが、従来から指摘されている。